



左から代表取締役の武藤元さん、息子で専務取締役の武藤元貴さん

## 町の鋳物屋さん

【武藤工芸鋳物】秋田市添川字境内川原228-5 TEL.018-832-5329

ゴーッと炎を噴きながら金属を溶かす溶解炉。  
溶けた金属「湯」を運ぶ作業「注湯」が始まった。  
「はい、いくよ」「はいよ」。  
声を交わして職人たちが機敏に動く。  
ハンドルを回して炉を傾けると、黄色く溶けた青銅が流れ出た。

### 緊張感漂う「注湯」

溶けた青銅をひしゃく型の「湯汲み」で受け取り、職人が素早く鋳型に注ぎ入れる。

青銅や黄銅の「湯」は約1200℃、鉄は約1400℃。鋳造の仕事は小さなミスが事故故につながりかねない。危険を回避できるのは職人たちの経験と勘、あうんの呼吸あってこそ。鋳型づくりや注湯直前まで重ねる用心など、それまでの仕事の積み重ねも試される。

### 代々続く鋳物職人

武藤工芸鋳物は、明治中期に秋田市旭南二丁目(旧室町)で創業。長屋の手狭な作業場から広い土地を求めて1971年に現在地に移転した。代々鋳物をつくり続け、代表の武藤元さんで5代目になる。手掛ける製

品は、銅像、案内板、表札、ネームプレート、建物や橋に取り付ける銘板など。「戦前は鉄瓶の製造や修繕が中心で愛称は『釜っこや』だったようです。時代が変わる中、代々それぞれが鋳物屋として自分は何ができるか悩

みながら時代に合う製品をつくってきた」と武藤さん。父で4代目の金悦さん(故人)は岩手で南部鉄器の製法を学び、鉄瓶の工芸化を目指した。そ

の縁で武藤さんは秋田高専卒業後、美術彫金を手掛ける東京の工房に就職。2年間修業した。

旧秋田市役所前にあった花時計の文字盤部分、秋田市民に親しまれる新屋海浜公園の「ももさだカエル」、能代火力発電所「冒険広場」の噴水のクジラ、2014年にロシア・サハリン州に設置された元横綱大鵬像などは同社の鋳造。今年秋田市文化

創造館の敷地内に設置された歌手・東海林太郎の立像を手掛け、約250キの青銅を鋳造する大仕事に挑んだ。「湯」の量や各職人の動きを計算しての一発勝負。「直前まで考えに考えて最後はやっぱり経験と勘。結果うまくいって良かったな」。しみじみ振り返る武藤さんの言葉に、作業を共にした息子の元貴さんが大きくうなずく。

### 次の時代の挑戦へ

東京の大学、大学院で学び、現地で就職。6年前にUターンして鋳物職

人となった元貴さん。父や祖父の背中を見て育ち、子どもの頃から鋳物の仕事に憧れていた。今は鋳造作業のほか、インターネット経由での焼印の受注生産や情報発信にも力を入れる。焼印で点字を作るオリジナル商品も開発中だ。「うちには技術の積み重ねがあるから、いろいろ引き受けられる」と胸を張る元貴さんに対し、「難しい注文が入ると職人冥利に尽きる」と笑う5代目。「何でも時代に合わせて挑戦していかなくや。うちはずっとそうしてきたから」と言葉が続ける。今は県内に数少ない鋳物屋の伝統と挑戦の物語は続く。